

## 農 作 概 況

## 〔水 稲〕

## 1. 作付の概況

九州における平成元年度の水稻作付面積は255,500haで、前年に比べ3,500ha (1%) 減少した。この減少率は前年までの値よりは小さいが、依然として作付面積は減少傾向にある。

## 2. 作柄の概況

九州における平成元年産水稻の収穫量は、125万6,000 tで、前年産に比べて4万4,000 t (3%) 減少した。これは作付面積の減少に加えて、10 a 収量も492kgと、前年産を9kg (2%) 低下したためである。しかし作柄を前年対比でみると、長崎県と熊本県がそれぞれ107, 106と「良」で、福岡県、佐賀県、大分県、鹿児島

1989年産水稻の収穫量及び被害程度

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	作 況 指 数	前 年 と の 比 較			
					作 付 面 積		収 穫 量	
					対 差	対 比	対 差	対 比
九 州	255,500	492	1,256,000	104	△3,500	99	△42,000	97
福 岡	53,500	506	270,700	103	△ 800	99	△ 8,400	97
佐 賀	35,900	535	192,100	103	△ 400	99	△ 9,000	96
長 崎	19,600	456	89,400	107	△ 400	98	△ 6,800	93
熊 本	52,800	517	273,000	106	△ 800	99	△ 8,400	97
大 分	33,200	487	161,700	104	△ 200	99	5,400	103
宮 崎	27,000	438	118,300	100	△ 700	97	△10,800	92
鹿 児 島	33,600	449	150,900	104	△ 100	100	△ 4,100	97

(単位: %)

区 分	総 合	気 象 被 害			病 害			虫 害	
		風 水 害	いもち病	紋 枯 病	ウ ン カ				
					いもち病	紋 枯 病	ウ ン カ		
九 州 計	本 年	7.6	2.1	1.8	4.4	2.1	1.3	1.0	0.4
	対 平 年 差	△4.3	△2.9	△0.8	△0.4	△0.2	0.2	△1.0	△0.8
福 岡	本 年	4.2	1.3	1.2	2.2	0.8	0.8	0.5	0.1
	対 平 年 差	△5.8	△3.4	△0.8	△1.5	△0.8	△0.1	△0.9	△0.8
佐 賀	本 年	6.3	0.6	0.5	4.4	0.9	1.6	1.2	0.3
	対 平 年 差	△6.2	△5.4	△1.8	△0.6	△0.8	0.5	△0.1	△0.6
長 崎	本 年	9.1	2.9	2.7	5.3	1.5	0.8	0.9	0.3
	対 平 年 差	△4.9	△4.1	△2.0	0.7	△0.6	0.2	△1.4	△1.3
熊 本	本 年	6.5	1.7	1.7	4.0	1.6	1.6	0.7	0.1
	対 平 年 差	△3.2	△2.4	△0.3	0.3	△0.3	1.0	△1.0	△0.9
大 分	本 年	5.2	2.1	0.5	2.6	1.6	0.7	0.4	0.1
	対 平 年 差	△6.4	△3.2	△1.8	△2.0	△1.8	0.0	△1.1	△1.0
宮 崎	本 年	14.4	3.2	3.2	9.7	7.4	1.5	1.3	0.6
	対 平 年 差	△1.1	△1.8	△0.2	1.8	3.1	△0.6	△1.3	△0.8
鹿 児 島	本 年	13.2	4.5	4.3	6.0	3.1	1.9	2.5	1.3
	対 平 年 差	△2.2	△0.1	0.6	△0.5	0.6	△0.3	△1.5	△1.3

注) 1. 資料「農林水産統計速報元-56(作統-8)」

九州農政局統計情報部

2. △印は「少ない」を示す。

3. 対平年差は、被害率の差をポイントで示したものである。

が103~104と「やや良」であり、九州全体としても「やや良」の作柄であった。

## 3. 生育概況

## (1) 早期水稲

従来早期水稲の作付が南部九州に行われていたが、近年中・北部九州でもかなりの作付面積に達している。本年の生育概況をみると、苗の生育は良好で、活着も順調であったが、分けつ期前半の低温で初期の茎数増加は緩慢であった。その後、茎数は増加して平年並みの生育となったが、出穂は7月上旬までの低温の影響で3~5日程度遅れた。

出穂後は、北部九州では好天により粒の肥大が良好となり、外観品質も良く多収となったが、中・南部九州では台風11号の影響で一部倒伏し、登熟歩合・玄米千粒重とも低下し、乳白米、青未熟粒等も多く、品質が低下した。

## (2) 普通期水稲

田植期は、全般的には麦の収穫も早く、6月上旬の降雨により用水も確保されて作業が順調であり、平年並み~やや早めとなった。

田植後、活着は良好であったが、以後7月1半月まで低温に経過したため、分けつは少なかった。しかしその後出穂期にかけて高温・多照に経過したため生育は回復し、穂数は全体的に多めとなり、稲体の充実度も増した。

出穂期は、大分県を除き平年並み~やや早めとなった。m<sup>2</sup>当たり穂数は、大分県では1穂穂数の増加が、その他の県では穂数の増加が大きく寄与し、全体的に多くなった。

登熟は、9月上旬の日照不足により初期には緩慢であったが、出穂前の蓄積炭水化物が多く、稲体が健全であったこと、9月中旬以降の高温・多照により全体的に回復し、平年並みとなった。この結果、収量としては「やや良」の作柄となった。

## 4. 被害の概況

気象被害としては、7月末の台風11号により早期水稲に冠水、倒伏、もみずれの被害が発生し、また秋雨前線の停滞による豪雨の影響で一部地域に倒伏が発生したが、全般的には被害が少なく、平年値を2.9%下回った。病害としては、紋枯病が多発し、また一部品種にもみ枯細菌病が発生した。また宮崎県の普通期水稲で穂いもち病が発生し品質・収量を低下させたが、地域全体としては平年に比べ若干少なめであった。虫害としては、ウンカ類の発生が極めて少なく、その被害は軽微であった。

以上のように本年は、気象被害、病虫害の発生が少なく、被害総合としては前年対比で4.3%の低下となった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔麦 類〕

1. 作付の概要

九州における麦類の面積は、4麦計93,800haで前年より2,600ha(5%)減少した。麦種別では、小麦が58,900haで前年より3,300ha(5%)、裸麦が741haで202ha(21%)それぞれ減少した。二条大麦は34,000haで900ha(3%)増加した。六条大麦は38ha(29%)減少し、94haとわずかな作付になった。田畑別の作付面積では、田作が86,200ha、畑作7,590ha(4麦計)であった。県別では、大分県の小麦、佐賀・熊本県の二条大麦が微増したほか、各県・各麦種ともに作付面積は前年同もしくは減少した。

2. 作柄の概要

九州全体の収穫量は、小麦163,000t、六条大麦338t、二条大麦107,700t、裸麦1,890t、4麦計では278,338tであった。前年に比較して、小麦が3,500t(2%)、二条大麦が3,500t(3%)それぞれ増加し、裸麦が610t(24%)、六条大麦が152t(30%)減少し、4麦計では6,238t(2%)増加した。これは、小麦では作付面積が減少したものの作付の多い北九州地域での10a当たり収量が前年を上回ったこと、二条大麦では面積が増加したことによるものである。10a当たり収量と作況指数は、小麦277kg(94)の「不良」、二条大麦317kg(103)の「やや良」、裸麦255kg(90)の「不良」であった。

表別及び県別の作柄は、小麦では被害の発生が比較的小なかつた佐賀県が「やや良」、福岡県が「平年並み」、その他の県では登熟期後半の風水害・湿害等により「不良」となり、鹿児島県では作況指数24で極めて低位となった。二条大麦は、登熟期間の天候に恵まれた佐賀県は「良」、福岡県が「やや良」であったほか、長崎・大分県がわずかに平年を下回る「やや不良」、その他の県は登熟期の雨害により「不良」であった。裸麦は、大分県が「平年並み」、長崎県が「不良」であった。

3. 生育概況

11月から12月の気温はやや低めで降雨も少なく、発芽は平年並みであった。その後2月にかけて高温・多雨の暖冬気味に経過し、分けつが少なかった。3月上旬の気温は平年並みで生育は抑制されたが、3月中旬から4月中旬は高温・寡雨となり、平年に比較して出穂期が7~10日、成熟期が3~7日程度早まった。穂数は少なかったが、1穂当たりの粒数は多かった。小麦は枯れ熟的に成熟し、粒の肥大が劣り、品質不良となった。二条大麦は佐賀県では充実が比較的優れ、品質良であったほか、福岡・長崎県ではともに平年並みで、その他の県では劣った。

4. 被害の概要

九州における本年の表別の総合被害率は、小麦25.4%、

第1表 1989年産麦類の収穫量と被害状況

麦・県別	作付面積 ha	10a当たり 収量 kg	収穫量 t	10a当たり 平年収量 kg	作況 指数	
						小
	九 州	58,900	277	163,000	296	94
	福 岡	19,900	314	62,500	316	99
	佐 賀	11,500	309	35,500	293	105
	長 崎	4,510	228	10,300	285	80
	熊 本	12,200	230	28,100	266	86
	大 分	9,840	259	25,500	304	85
	宮 崎	315	239	753	...	...
	鹿児島	582	58	338	237	24
二	全 国	75,500	344	260,000	335	103
九	九 州	34,000	317	107,700	308	103
州	福 岡	6,680	318	21,200	312	102
条	佐 賀	15,800	351	55,500	315	111
大	長 崎	1,370	296	4,060	306	97
麦	熊 本	3,840	266	10,200	297	90
	大 分	2,490	301	7,490	306	98
	宮 崎	1,050	261	2,740	277	94
	鹿児島	2,840	230	6,530	279	82
裸	全 国	8,570	296	25,400	348	85
麦	九 州	741	255	1,890	282	90
	福 岡	2	268	5	...	...
	佐 賀	43	281	121	...	...
	長 崎	327	226	739	276	82
	熊 本	52	248	129	...	...
	大 分	260	300	780	304	99
	宮 崎	35	226	79	...	...
	鹿児島	22	182	40	...	...

県別	小 麦		二 条 大 麦		裸 麦	
	被害率 %	平年差 %	被害率 %	平年差 %	被害率 %	平年差 %
全 国	19.0	2.1	16.6	▲1.7	29.9	13.4
九 州	25.4	8.1	17.8	▲1.0	22.6	6.1
福 岡	20.0	5.5	15.6	▲1.2	...	...
佐 賀	21.9	▲0.6	13.6	▲7.8	...	...
長 崎	30.7	9.9	17.1	▲0.5	28.2	6.6
熊 本	34.2	17.5	30.3	12.0	...	...
大 分	26.8	11.0	16.8	1.5	14.8	2.9
宮 崎	...	...	18.8	5.8	...	...
鹿児島	89.9	75.3	33.3	17.2	...	...

注) 1. 資料:「平成元年度4麦の作柄・被害状況」  
農林水産省統計情報部作物統計課  
2. ...は事実不詳又は調査を欠くもの  
3. ▲は減を示す

二条大麦17.8%、裸麦22.6%であった。これを平年と比べると、小麦が8.1%、裸麦が6.1%多かったが、二条大麦では1.0%少なかった。気象被害は、5月10日以降の連続降雨により、鹿児島県では穂発芽等が発生して大きな被害をもたらしたほか、小麦ではその他の全県で、二条大麦では熊本・宮崎県を中心に被害が発生した。特に小麦では枯れ熟れ等の発生により、収量・品質が低下し

た。病害等、その他の被害は少なく、平年並みであった。全体的にみると、小麦・裸麦が平年を大きく上回り、二条大麦が平年並みの被害であった。

(九州農業試験場水田利用部)

## 〔カ シ ョ 〕

### 1. 作付の概況

本年の九州及び沖縄におけるカンシヨの作付面積は、29,227haで前年の約4%減であったが、本地域は依然として主要産地であり、全国作付面積の47%、鹿児島県だけでも33%を占めた。

### 2. 作柄の概況

床伏期は平年並みないし5日程度早く、萌芽及び苗の生育は平年並みないしやや良であった。挿苗期は早掘栽培の増加等により平年並みないし5日程度早く、苗の活着は平年並みないしやや良であった。活着後の茎葉の生育はおおむね天候に恵まれたことからほぼ平年並みで、着イモ数は平年並みないしやや多かった。イモの肥大は7月下旬から9月上旬にかけて寡照等に経過したことから緩慢であったが、その後9月中旬から10月にかけておおむね高温・多照に経過したことから促進され平年並みないしやや良であった。九州・沖縄の作柄は「平年並み」である。

(九州農業試験場畑地利用部)

### 2. 作柄概況

6月中～下旬の降雨が少なかったため、播種期を早くしたところが多かった。7月中旬～8月下旬は晴天の日が多く生育は順調であった。しかし、9月上～中旬に雨天の日が続いたため、子実の肥大が抑えられた。9月下旬以降は晴天の日が多く登熟は良かった。単収は195kgで全国の179kgを上回った。県別では熊本県の210kgが最高で全国3位にあたる。作況指数は九州全体では113、県別では長崎143、佐賀124、福岡121が高かった。

(九州農業試験場作物開発部)

1989年度 大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当たり収量	収穫量	作況指数	前年との対比			
					作付面積		収穫量	
					対差	対比	対差	対比
全国	151,600	179	271,700	102	▲10,800	93	▲5,200	98
九州	24,600	195	47,900	113	▲1,000	96	▲3,000	94
福岡	4,820	198	9,540	121	▲80	98	▲460	95
佐賀	5,060	200	10,100	124	▲330	94	▲1,500	87
長崎	1,800	200	3,600	143	▲80	96	▲70	98
熊本	5,820	210	12,200	102	▲90	98	▲200	98
大分	4,510	171	7,710	104	▲100	98	10	100
宮崎	1,510	178	2,690	101	▲90	94	▲240	92
鹿児島	1,090	193	2,100	103	▲200	84	▲450	82
沖縄	7	100	7	—	4	233	4	233

注) 1. ▲は減少を示す。

2. 資料は農林水産統計速報元-265(作統-20)による。

1989年度 カンシヨ作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当たり収量	収穫量	作況指数	前年との対比				
					作付面積		10a当たり収量		収穫量
					対差	対比	対比	対差	対比
全国	61,900	2,310	1,431,000	102	▲1,000	98	109	105,000	108
九州	28,800	2,600	749,000	101	▲1,100	101	107	25,100	103
沖縄	427	2,270	9,690	97	▲14	97	106	210	102
福岡	370	1,570	5,810	102	2	101	101	70	101
佐賀	279	1,990	5,550	102	▲1	100	96	▲250	96
長崎	1,750	2,100	36,800	106	▲70	96	101	▲900	98
熊本	1,520	2,410	36,600	105	▲130	92	109	0	100
大分	567	1,880	10,700	98	▲52	92	103	▲600	95
宮崎	4,070	2,490	101,300	101	▲170	96	103	▲900	99
鹿児島	20,300	2,720	552,200	100	▲600	97	108	27,600	105

注) 1. ▲印は減少を示す。

2. 資料は農林水産省統計情報部農林水産統計速報元-261(作統-19)による。

## 〔野 菜〕

### 1. 概況

前年からの高温により野菜の生育は前進化の傾向が強かったが、年明け後の多雨・日照不足のために生育が停滞し、品質の低下が目立った。しかし3月以降は日照が多く全体として好結果が得られた。梅雨期は降雨が少なく、気温はやや低めに経過した。7月下旬の台風11号及び9月中旬の同22号、並びに9月の長雨は野菜作に大きな影響を与えたが、10月以降は好天に恵まれ、野菜の生育は全般に回復した。

### 2. 冬春野菜

果菜類は前年からの暖冬傾向により生育が促進されたが、1989年に入ると日照不足と高夜温の影響が強くなり表れた。促成キュウリや促成ナスでは、草勢が低下し、不良果の発生が目立った。しかし3月以降は草勢が回復し、収穫打ち切りは早くなったものの、総収量は多かった。促成トマトは、低段果房の肥大が悪く、収量はやや劣った。促成ピーマンでは、冬期灰色かび病の発生が多く、また草勢の低下がみられたが、回復は早く、春先以降は好天のため総収量は高かった。ただし単価は相当に低かった。メロンは初め小玉果が多かったが、4月下旬収穫か

## 〔大 豆〕

### 1. 作付の概況

本年度の大豆作付面積は全国では151,600haで、前年より10,800ha減少した。九州でも1,000ha減少し、前年対比96となった。県別では鹿児島が84で急減した。

らは果実の肥大・品質とも優れた。イチゴでは、低温処理育苗の普及と暖冬のために収穫の早進化が著しかった。冬期の日照不足により肥大不良や奇形果の発生がみられたものの、高価格にも支えられ、全般に良好な成績が得られた。ハウス栽培のキヌサヤ・ソラマメなどは、暖冬による前進化のため後半の草勢低下が目立ち、収穫打ち切りが例年より1か月程度早まった。

タマネギは生育が進み過ぎの状態になり、特に極早生種、早生種は徒長的生育を示し、病害の発生もみられた。また中・晩生種は5月中旬の長雨により充実不良球・腐敗球の発生をみた。しかしいずれも最終的には前年以上の収量が得られた。冬どりキャベツは、高温・多雨のため大玉傾向で、収穫期が20日程度前進した。しかし春どりキャベツでは、球の肥大が悪く、チャボ球が発生した。冬どりレタスでも同様に大玉化の傾向がみられ、腐敗球の発生が目立った。

### 3. 夏秋野菜

キュウリ、トマト、ナス、ピーマンなどの果菜類は、5月の長雨・低温・強風の影響を受けて生育が遅れた。またそれ以降に定植のものは、乾燥により草勢が弱く、品質、収量とも全般に低下した。また中・南九州では台風11号の被害が大きかった。サトイモも台風11号並びに22号による茎葉の倒伏のため低収となった。キャベツ、ダイコンも、同様に台風の被害により減収した。北部九州のレタスでは、台風の影響はなかったが、播種期により、5月もしくは9月の長雨のために活着遅延、球のしまり不良、病害発生などの被害が出た。

### 4. 秋冬野菜

抑制栽培のキュウリや促成栽培のナス、トマト、ピーマン、イチゴでは、9月の長雨により苗が軟弱気味となり、また本圃の準備、定植の遅れがでて初期生育が抑制された。しかし10月以降は好天に恵まれ、気温も高めに推移したことから生育は徐々に回復し、収量も増大した。葉根菜類については、8月に播種もしくは定植する型では乾燥による播種・定植作業の遅れと、その後の長雨の影響が大きかった。また9月に播種・定植する型では、長雨によるそれら作業の遅れや病害の発生がみられた。ただし10月以降の好天により回復し、高温による生育の進み過ぎが懸念される状況となった。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

## 〔果 樹〕

### 1. 常緑果樹

1989年産温州ミカンのはかんきつ園地再編対策事業による面積の減少もあり、表年にもかかわらず大幅な増収にはならなかった。しかし、反収の対前年比は、沖縄県は105%とやや低いが、他県は112~124%であった。1988年産が不作であったことから、ほぼ1987年産並みといえ

る。しかし、面積の減少もあり、九州8県の生産量は80万t前後と思われる。

冬季は温暖に推移し、開花期の温度が高く、発芽日は平年に比べ大部分の県で10日以上早かった。開化日も沖縄、大分県では約5日、他県は約10日早かった。花の量は全県とも多かった。新梢の発生も比較的多かった。

7~8月の少降雨量、多結実量等により果実肥大は平年に比べ劣った。9月の十分な降雨で回復したが、沖縄、鹿児島県を除き対前年比95%程度であった。

10~11月の天候は良く、糖度は沖縄県を除き平年並みからそれ以上であった。減酸は早く、食味は沖縄県を除き、良好であった。外観は開花期の天候不順による灰色かび病の発生、台風11号(7月27日~28日)の影響もあり、やや劣る県が認められた。宮崎、沖縄県の早期出荷タイプの着色は遅れた。晩秋~収穫期の気温が高く普通温州の浮皮が目立った。長崎、熊本県では早生温州のカメムシの被害が目立った。

甘夏も発芽、開花日とも温州ミカン並みに早く着花量も多かった。果実肥大は良好で、糖度が高く、酸が低い食味良好な果実が生産された。栽培面積の減少は進んでおり、熊本県は対前年比83%の結果樹面積となった。

ポンカン、鹿児島県では発芽、開花日ともに早かったが、宮崎県では遅れた。花の量は少なかった。秋期の気温が高く着色は遅れたが糖度は高く食味は平年より良かった。台風11号、22号(9月上旬)の被害、結実量不足で外観はやや不良であった。作柄は平年並みからやや不作で鹿児島、宮崎両県で16,000t弱である。

日向夏はやや豊作であった(前年比107%)。果実肥大は良好だったが、食味は平年並みであった。

九州北部の宮内伊予柑は作柄、外観、食味とも平年並みであった。宮崎県のニンボウキンカン是对前年比105%で1,590t生産された。品質は平年並みであった。

ビワは、長崎県は前年比225%で豊作、鹿児島県は106%であった。両県で約6,000tが生産された。食味は平年並み~良であった。外観は長崎、鹿児島県とも不良だった。長崎県ではへそ青果、へそ黒果、しなび果が多発、鹿児島県では小裂果、紫斑病が発生し商品化率が低下した。長崎県では収穫盛期の雹害で約1割減収した。

沖縄県のパイナップルは豊作で前年比107%であった。推定収量は38,000tである。開花期、成熟期ともに15日ほど早く、糖度高く、減酸も早く食味は良好であった。果実肥大も良好で外観も良いものが生産された。レイシ、マンゴーは豊作で食味も良いものが生産された。

### 2. 落葉果樹

台風11号と9月の多雨が収量、果実品質に影響を及ぼした。台風11号は鹿児島、宮崎、熊本、大分県で被害があり、ナシ、早生グリでは落果、ブドウ、カキ、キウイフルーツ、モモでは葉の損傷、落葉、クリでは倒状が目立った。9月の多雨はキウイフルーツ、イチジクの果実品質、カキのヘタすき果の発生に悪影響した。

ナシ 作柄は、鹿児島、宮崎県の産地を除き平年並みからやや豊作であった。主産地の発芽、開花日は平年より約1週間早く、成熟期も4日ほど早かった。果実肥大は全般に良好で、品質も宮崎県を除き、糖度が高く、食味は良好であった。熊本、大分県の新高、福岡県の豊水でみつ症が発生した。特に熊本県では著しかった。福岡県の新高にゆず肌果が多発した。

ブドウ 巨峰の作柄は全般にやや不作であった。多くの産地で開花期の低温、降雨による花ぶるい、灰色かび病の発生が認められた。単為結実果も多かった。

発芽、開花日は3~7日早く、成熟期も3~5日早かった。全般に糖は高いが、食味は平年並みであった。外観は、傷、着色不良等でやや不良であった。

カキ 福岡県の富有は果実肥大は良かったが、やや糖度が低く食味は平年並みであった。着色は遅れた。作柄は豊作で対前年比123%であった。福岡、熊本県でカメムシの被害が目立った。福岡県の伊豆は開花期の天候不順で生理落果が多く、大幅な減収(対前年比62%)となった。南九州の西村早生は高品質のものが生産された。

クリ 熊本、福岡県はやや豊作、宮崎県は不作であった。熊本県では果実肥大が良く外観も良好のものが生産された。熊本県で穂の日焼病が多発した。

キウイフルーツ 全般に花腐れ細菌病が多発し、不作~やや不作であった。外観も奇形果の発生によりやや不良の傾向が強かった。食味は平年並みからやや不良の産地が多かった。

モモ 作柄は対前年比107(福岡)~111(熊本)でやや豊作であった。成熟期に好天に恵まれ糖度が高く食味は良好であった。しかし、肥大はやや劣った。鹿児島県の早生モモは外観、味とも良いものが生産された。

その他 福岡県のイチジクはやや不作で食味は平年並み、スモモの品質は良好であった。鹿児島、沖縄県のスモモ(カラリ)は、鹿児島県では豊作で食味良、沖縄県ではやや不作で食味は平年並みであった。

(果樹試験場口之津支場)

## [ 茶 ]

### 1. 一番茶

萌芽前の気温は、3月上旬に一時低下して降雪がみられることもあったが、1月上旬から3月中旬までの気温は概して高く、例年にない暖冬で推移した。しかし、3月下旬と4月中、下旬はやや低く推移した。1月から2月までの降水量は平年に比べて多く、その後は概して少なめであったが、全体としては適度の降水量であった。

暖冬の影響を受けて、萌芽期は早まり、平年に比べて北九州で6日、南九州で5日ほど早まった。摘採期も北九州で8日、南九州で3日ほど早まった。

本年は、茶芽生育期間中に、山間部で軽い降霜がみら

れただけで被害はほとんどなく、各地とも茶芽の生育は良好で、収量はほぼ平年並みであった。病虫害の発生については、北九州ではチャノホソガが多発した所がみられ、南九州では、暖冬のため越冬ダニの密度が高く、カンザワハダニの多発した所がみられた。

### 2. 二番茶

一番茶摘採以後の気温は各地とも全般的に低く推移した。降雨は、茶芽生育期の5月中旬から6月中旬にかけては少なかったが、5月中旬にまとまった降雨があったため、土壌水分は十分であった。

このように、気温、降水量に恵まれたため、生育は順調で、収量はほぼ平年並みであった。病虫害の発生については、北九州ではチャノホソガ、カンザワハダニの発生が多かった。南九州では、病虫害の発生は全般的に少なかったが、早場地帯の生育初期にカンザワハダニの多発がみられた。

### 3. 三番茶

二番茶摘採以後三番茶までの気温は、各地とも平年に比べて低めに推移した。また、降雨も平年に比べて少なく、比較的気象環境に恵まれていた。このような気象の影響を受けて、二茶から三茶までの期間が長くなったため、早摘みとなり減収となった所もあった。しかし、茶価が堅調であったため、摘採期を遅らした所も多く、そのような所では増収となった。

病虫害の発生については、全般的に少なかったが、南九州では輪斑病の多発した所もみられた。

なお、九州における主要茶産地の摘採期及び10a当たりの生産量は第1表に示すとおりである。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

第1表 主要茶産地の摘採期及び10a当たり収量

産地名		一番茶		二番茶		三番茶	
		摘採期 月日	収量 kg	摘採期 月日	収量 kg	摘採期 月日	収量 kg
大隅	本年	4/24	543	6/8	496	7/15	389
	前年	4/30	490	6/15	296	7/22	334
	平年	4/27	494	6/12	430	7/20	336
知覧	本年	4/24	566	6/9	391	7/21	293
	前年	4/30	595	6/13	552	7/18	375
	平年	4/28	594	6/11	544	7/18	389
川南	本年	5/3	723	6/16	724	7/21	428
	前年	5/5	849	6/16	833	7/19	741
	平年	5/1	713	6/12	727	7/17	634
彼杵	本年	5/2	529	6/26	398	7/31	325
	前年	5/9	600	6/24	486	7/29	208
	平年	5/10	479	6/26	406	7/31	289
嬉野	本年	5/1	590	6/17	545	7/26	473
	前年	5/9	662	6/24	532	8/1	367
	平年	5/10	610	6/26	530	8/2	392

## 〔畜 産〕

### 1. 肉用牛

1989年2月1日における全国の肉用牛飼養頭数は265.1万頭で、前年比100%であった。全頭数のうち103万頭が乳用種で、その割合は38.7%で前年とほぼ同じであった。九州における肉用牛の飼養頭数は853,400頭で前年度に比べて約7,000頭(前年対比102.5%)の増加であった。全国の飼養頭数に対する九州の頭数割合は32.2%で前年度とほとんど変わりのない割合であった。九州で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(271,200頭)、宮崎県(217,800頭)、熊本県(138,700頭)であり、これら3県で九州全体の73.6%を占めていた。九州は肉用牛中の乳用種割合が最も低い地域であり、その割合は19.2%であった。九州における肉用牛の用途別飼養頭数割合をみると、肉用種雌牛の割合が高く53.6%(45.7万頭)で、割合・頭数共に前年同様の数値であり、ここ数年見られた雌牛飼育数の減少傾向が見られなかった。全国の肉用種繁殖雌牛飼育頭数に対する九州の繁殖雌牛飼育頭数割合は43.7%で、従来と同様に九州地域が肉用種の主要な子牛生産基地であることが示された。

九州における肉用牛飼養戸数は98,700戸で前年対比で5,200戸(-5%)減少しており、従来からの傾向が続いた。1戸当たりの飼養頭数は8.6頭で前年の8.1頭より僅かに増加した。1戸当たりの飼養頭数が多い県は福岡県(48.5頭)であるが、これは乳用種飼育の大規模経営が多く行われた結果であった。子とり用雌牛の1戸当たり飼養頭数は3.5頭で、前年より0.4頭増加したが規模の拡大は余り進まなかった。

肉用牛の子牛価格は以前として高水準を維持しており、九州における指定市場の子牛価格は1988年末で、和牛去勢牛が55万円前後、和牛雌牛が45万円前後を示した。このような子牛の高値を反映して1988年の和牛繁殖経営では、繁殖雌牛1頭当たりの粗収益45.5万円、所得17.2万円といずれも前年を大きく上回る結果となった。肥育経営も1988年は好調さを持続しており、1頭当たり肉用種去勢牛で22.3万円、乳用種去勢牛で10.7万円の所得をあげた。

### 2. 乳用牛

1989年2月1日での全国の乳用牛飼養頭数は、203.1万頭で前年より1,400頭(前年対比100.7%)の増加であった。九州における飼養頭数は19.2万頭で前年より2,000頭(前年対比102.5%)の増加で、全国でも増頭割合の高い地域であった。九州で飼養頭数の最も多い県は熊本県(60,100頭)で、次いで福岡県(30,900頭)、宮崎県(29,300頭)が多かった。ここ1、2年の牛乳消費の好調さうけて全国的に飼養頭数が増加傾向を示しており、九州地域でも佐賀県と長崎県を除いた各県で飼養頭数が増加した。

1989年2月1日における九州での乳用牛飼養戸数は6,440戸で前年対比200戸(-3%)減少した。九州は北海道について減少割合の低い地域であった。前年対比で最も飼養戸数の減少が多かったのは熊本県で70戸の減少であった。

全国平均の1戸当たり飼養頭数は、1989年2月1日で30.4頭と前年より1.8頭増加したが、九州での1戸当たり平均飼養頭数は29.8頭で前年対比1.6頭の増加であった。飼養規模の拡大は牛の絶対数の増加によるよりも、飼養農家戸数の減少によって進んだ。九州で1戸当たりの平均飼養頭数が全国の平均を上回ったのは大分県(35.5頭)、福岡県(34.0頭)、熊本県(33.2頭)、宮崎県(30.8頭)の4県であった。

九州における1988年(1月~12月)の生乳生産量は約716tで前年より4.6%多い生産量であった。全国の生乳生産量7,608tに対する九州での生産割合は9.4%であった。1987年7月以降の飲用牛乳に対する需要増大の傾向は現在も続いているが、平成元年度に入ってその伸び率はやや鈍化の傾向を見せている。

搾乳牛1頭当たりの所得は、1頭当たりの乳量増加、乳用雄子牛の高価格等の要因を反映して好調に推移しており、九州における63年の搾乳牛1頭当たりの所得は31.8万円で、前年の30.4万円を上回った。

### 3. 豚

1989年2月1日における全国の飼養頭数は1,186.6万頭で、前年対比14.1万頭(+1.2%)の増加となった。九州での飼養頭数は299.1万頭で、前年対比11.7万頭(+4.1%)の増加であり、全国の増加率を大きく上回る増加を示した。九州で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(124.0万頭)、宮崎県(75.2万頭)、熊本県(31.6万頭)であり、この3県で九州の全飼養頭数の約77%を占めた。前年に比べて増加割合の大きい県は宮崎県(111.9%)、佐賀県(105.5%)、鹿児島県(103.3%)であった。

枝肉価格の低迷のため、中小規模階層での飼養中止が多く、飼養戸数は全国で7,300戸減少した。九州では1,400戸(-11.1%)飼養戸数が減少した。前年に比べて飼養戸数減少割合の大きい県は長崎県(-16.9%)、熊本県(-15.4%)、大分県(-11.5%)で、これら3県が九州の平均減少割合よりも高い減少率を示した。

飼養戸数が大きく減少したのに対して、飼養頭数が増加したため、1戸当たりの飼養頭数は増加しており規模の拡大が進んだ。1989年2月1日の九州における1戸当たり飼養頭数は269.1頭(前年より39頭増加)であった。特に、飼養規模の大きい県は鹿児島県(388.7頭)、大分県(376.3頭)、福岡県(313頭)で、昨年と同じ3県が上位を占めた。

九州各県では品質等の優れた銘柄豚を生産するため系統豚の造成を進めているが、すでに6系統「ブンゴーク」、「ハマユウ」、「サツマ」等が造成されその普及

が進められた。

#### 4. 採卵鶏

1989年2月1日における採卵鶏（種鶏を除く）の全国飼養羽数は17,993万羽（ヒナを含む）で、前年に比べ0.3%の減少した。九州での飼養羽数は3,186.5万羽で前年に比べ4.2%増加した。九州で飼養羽数の多い県は前年同様、鹿児島県（992.8万羽）、福岡県（699.1万羽）、宮崎県（479.4万羽）で、これらの3県で九州の全飼養羽数の68.1%を占めた。

飼養戸数は全国で94,400戸（前年対比7,700戸減少）、九州で26,400戸（前年対比1,200戸減少）であった。九州では飼養戸数の減少に対して飼養羽数が増加したため1戸当たりの飼養羽数は増加し、1戸当たりの成雌飼養羽数は900羽（前年に比べ55羽増加）となった。九州では福岡県の飼養規模が飛び抜けて大きく1戸当たり3,780羽で、全国の平均飼養規模1,472羽を大きく上回った。計画生産等の対策によって63年9月以降の卵価は比較的堅調に推移した。

#### 5. プロイラー

1989年2月1日での全国飼養羽数は15,385万羽で前年に比べて0.7%減少したが、九州では2.9%増加して7,146.1万羽となった。全国の飼養羽数に対する九州の飼養羽数割合は46.5%で、前年よりも1.7%その割合が高くなっており、九州地域は日本におけるプロイラーの主要な生産基地としての色彩を一層強めた。

九州では宮崎と鹿児島県の両県における飼養羽数が多く（5,397.1万羽）、九州全体の75.5%、全国の35.1%を占める飼養羽数であった。

飼養戸数は例年同様に減少しており、1989年2月1日の九州における飼養戸数は2,174戸で前年に比べ65戸減少した。飼養戸数の減少による飼養規模の拡大が進んでおり、九州における1戸当たりの飼養羽数は32,900羽で

前年に比べ1,900羽増加した。

円高に伴う鶏肉の輸入は年々増加しており（対前年比33.5%増）、1988年の平均価格は245円/kgと前年よりも20%低下した。

高品質鶏肉生産のために作出された銘柄鶏「さつま若しゃも」「熊本コーチン」「はかた地どり」等から生産される鶏肉は各地で好評を博した。

（九州農業試験場畜産部）

### 〔飼料作物〕

#### 1. 冬作

1989年度の九州地域における冬作飼料作物の作付面積は63,274haで、前年に比べ409ha減少した（以下、第1表参照）。作物別ではイタリアンライグラスが1位で51,370ha（前年比100ha増）、ついでエン麦が9,473ha（同246ha減）、飼料用レンゲが2,109ha（同285ha減）、青刈麦類が322ha（同22ha増）であった。

これらの作柄は、1～2月にかけて高温・適雨に経過し順調であったが、その後の多雨の影響を受けた熊本、宮崎、鹿児島3県では平年をやや下回った。

#### 2. 夏作

主要4作物の作付面積は69,439haで、前年に比べ657ha増大した。作物別では、10数年来増大し続けている青刈トウモロコシが28,136ha（前年比601ha増）、ここ数年減少ないし停滞している青刈ソルガムが20,357ha（同230ha減）、牧草が19,190ha（同470ha増）、飼料用カブが年々減少して1,756ha（同184ha減）であった。なお、青刈トウモロコシ、青刈ソルガムの水田での作付率は、それぞれ32.5%、50.7%であった。

トウモロコシ、ソルガムの作柄は、台風11号による倒

第1表 1989年度冬・夏作飼料作物作付(栽培)面積

(単位: ha)

県別	冬 作					夏 作				
	エン麦	青刈麦類	イタリアンライグラス	飼料用レンゲ	計	牧草	青刈ソルガム	青刈トウモロコシ	飼料用カブ	計
福岡	△ 176	18	△ 2,330	10	△ 2,534	330	△ 1,050	△ 678	△ 42	△ 2,100
佐賀	△ 194	△ 2	△ 1,530	△ 16	△ 1,742	△ 250	△ 1,200	△ 418	△ 9	△ 1,877
長崎	789	49	△ 4,680	△ 108	△ 5,626	480	△ 3,180	1,280	△ 82	5,022
熊本	552	3	△ 8,840	△ 147	△ 9,542	7,560	3,290	9,030	319	20,199
大分	△ 192	29	2,790	△ 537	△ 3,548	△ 3,770	△ 847	2,010	△ 85	△ 6,712
宮崎	△ 1,150	19	△ 17,400	△ 630	△ 19,199	1,800	6,270	8,010	△ 693	16,773
鹿児島	△ 6,420	△ 202	13,800	△ 661	21,083	5,000	△ 4,520	6,710	526	16,756
九州全体	△ 9,473	322	51,370	△ 2,109	△ 63,274	19,190	△ 20,357	28,136	△ 1,756	69,439

注) 冬作: 農林水産統計速報 元-20(作統-1), 夏作: 同速報 元-50(作統-7), 聞き取りにより資料を補充。

△印は前年度より減少を示す。青刈麦類は事実上2条大麦である。レンゲは緑肥との兼用を含む。

夏作牧草はイタリアンライグラスを含まない。

伏・折損等の被害及び9月の寡照のため宮崎、鹿児島2県で「不良」となったが、他の県では「やや不良」～「平年並み」であった。

(九州農業試験場草地部)

## 〔養 蚕〕

### 1. 概 況

1989年度の九州地方における養蚕農家戸数は3,690戸で、前年に比べて340戸(8%)減少した。これは前年の減少率(22%)より低い。養蚕従事者の高齢化、後継者不足等のため前年に続き掃立を中止したためである。掃立卵量でみると、本年度は69,400箱で前年並みであった。掃立卵量規模別では20箱未満の小規模農家は13%減少したが、20箱以上の大規模農家は19%増加した。繭の生産(取繭量)は2,312tで前年比1%増となり、これまでの減産傾向にやや歯止めがかかった。農家戸数は減少したが掃立卵量、繭の生産量が減少しなかったのは、繭価の回復により農家の生産意欲が高まり、規模拡大が進んだためである。1987年以降の糸価の回復高騰はシルクブームや生糸の生産と需要の変化に支えられ、1988年以降、繭価が比較的高値で推移してきた。そのため現存農家に生産意欲が表れ、各県において繭増産に対する諸対策が計画されてきた。小規模農家の養蚕離れが続く中

で休止農家の養蚕復帰、新規養蚕農家が出現した等明るい話題もあるが、農家の高齢化や後継者難等構造的問題は残されている。

### 2. 作 況

1989年春は気温が高めであり、桑の発芽は各県で平年より7～10日早く、その後、順調に発育し桑の収量は概して多かった。夏秋期は全般に平年に比べ日照が少なく気温が低めに経過した。7月下旬には台風11号が来襲し、後期には干ばつ気味の地域もあり桑の発育伸長は平年並みか、やや劣る地域があったが、減収するほどではなかった。病害虫は春期は熊本で縮葉細菌病、鹿児島では各地でヒメゾウムシの発生が目立ち、夏秋期はクワシントメタマバエ、キボシカミキリが発生した。鹿児島の一部で桜島火山降灰、晩秋期には阿蘇火山降灰により熊本、大分、宮崎各県の一部地域に被害が発生した。なおまだ隣接作物からの農業害が局部的に発生している。蚕の作柄は、春蚕期は比較的好天に恵まれ全般に良好であったが、夏秋期は一部の地域で膿病、硬化病、軟化病等が発生した。しかし、蚕種1箱当たり取繭量は33.3kgであって前年並みで作柄は概してよかった。台風、火山灰、蚕病等による被害量は繭換算143.4t、被害率5.8%で、前年に比べてやや低かった。東日本では、春期の凍霜害、夏期の低温のために減収したが九州地域は年間を通じまずまずの作柄であった。

(九州農業試験場作物開発部)